

# 霞

—2012年度夏季展示室だより—

土浦市立博物館

平成24年7月1日発行(通巻第20号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

## 古写真・絵葉書にみる土浦(20)

### 絵葉書「常陸名所 土浦汽船発着所ノ景」



土浦汽船発着所ノ景 常陸名所

## 目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(20)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1  
【夏休みファミリーミュージアム他】
- 三彩・二彩陶器(古代)・・・2
- 石摺十六羅漢画(中世)・・・3
- 岡部洞水画「農耕図」(近世)・・・4
- 城下町の洪水記録(近世)・・・5
- 戦時下の水郷めぐり(近代)・・・6
- 市史編さんだより・・・7
- 霞短信「昨年度校外学習の感想」・・・8
- コラム(20)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

明治時代末期から大正時代の霞ヶ浦の土浦入りの風景です。かつて町の中心を流れていた川口川の河口で、中央奥には高瀬船が停泊しています。左手前は蒸気船です。霞ヶ浦沿岸の町村を結ぶ定期船は、土浦から潮来、佐原、鹿島、銚子方面への重要な交通手段として利用されました。

【情報ライブラリー検索キーワード「高瀬船」「汽船」】

## 博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ 「私の考古学五十年」と題し、考古学者としての歩みをお話します。

7月15日(日)・8月19日(日)・9月16日(日)

各日とも午後2時~(1時間30分程度) 会場:博物館視聴覚ホール

### 《夏休みファミリーミュージアム》

★★テーマ展 「記録された天変地異—土浦の洪水・地震・大風—」★★

会期 2012年7月21日(土)~9月2日(日)

土浦で起きた洪水・地震・大風などの天変地異に関する記録をもとに、大規模な災害に対して先人たちがどのように立ち向かっていったのかをふり返ります。

★★夏休みスペシャル講話 「災害の歴史から何を学ぶか」★★

とき 9月2日(日)午後2時~3時30分(7月10日から申込み受付・定員70名)

講師 北原糸子さん(立命館大学歴史都市防災センター教授)

★★親子史跡めぐり★★

とき 8月17日(金)午前9時~午後4時30分(予定) 小雨決行

行先 阿波大杉神社・横利根閘門・長勝寺など(7月10日から申込み受付・定員40名)

★★ミニ掛軸をつくろう・親子はたおり教室★★ (詳細はお問い合わせください)

★祝日開館します★ 7月16日(月)、9月17日(月)

★休館日のお知らせ★ 毎週月曜日(但し7月16日・9月17日を除く)、7月17日(火)、9月18日(火)



博物館マスコット  
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

# 三彩・二彩陶器

## —古代高級陶器の伝来—

三彩・二彩陶器は、土器を二度焼成して<sup>うわぐすり</sup>釉を定着させる陶器で、一度目は白色の粘土で器物の原形をつくり、窯の中で1000度を超える高温で<sup>すや</sup>素焼きされます。冷却の後、各種の釉をかけ、再度窯の中で850～950度の低火度で焼成されます。これらは奈良時代に畿内地域で生産された高級陶器で、三彩は白と褐色と緑、二彩は白と緑に<sup>いろど</sup>彩られ、総称して奈良三彩、あるいは<sup>さいゆう</sup>彩釉陶器と呼ばれています。当時の文献には「瓷」・「瓷器」、「青瓷」・「青子」と記され、「シノウツワモノ」、「アオシ」などと呼ばれていたことが知られます。

古代の日本でながく使われていたのは、素焼きの<sup>すえき</sup>須恵器や<sup>はじき</sup>土師器など実用的な「やきもの」でした。一方中国では、<sup>とうさんさい</sup>唐三彩や<sup>せいじ</sup>青磁、<sup>はくじ</sup>白磁など釉をかけた色あざやかな陶磁器が作られています。中国の唐三彩は埋葬に伴う墳墓への副葬品として使用され、その形は人物、動物、器物などで、器物は容器の他、枕、文房具など多彩なものでした。日本でも奈良時代になって唐三彩の技法を導入し奈良三彩を作りだします。日本における奈良三彩の出土は、<sup>かんが</sup>官衙、寺院、墳墓、邸宅、住居跡などさまざまで、祭祀関係の遺構が多く、唐三彩のように人物や動物の造形はなく、その使用目的が<sup>はんざく</sup>儀礼・儀式用の調度品だったことが窺われます。世界最古の伝世品とされる東大寺の正倉院三彩は、奈良三彩を代表するものです。もとは東大寺が用いる儀式用の調度品でしたが、<sup>てんりやく</sup>天曆4(950)年7月これらを納めてあった<sup>はんざくいんそうくら</sup>絹索院双倉(ならびくら)が暴風のため倒壊し、正倉院南倉に移封されたもので、三彩5点(塔1、<sup>ことう</sup>鼓胴1、鉢2、碗1)、二彩35点(瓶1、大皿9、大平鉢3、平鉢6、鉢12、碗4)、緑釉12点(鉢11、碗1)、黄釉3点(碗3)、白釉2点(大皿1、碗1)、合計57点の彩釉陶器が伝世しています。

1991年、霞ヶ浦の土浦入り北岸の台地上、土浦市田村<sup>おまじほく</sup>・沖宿遺跡群にある<sup>てらぼた</sup>寺畑遺跡と石橋北遺跡から三彩・二彩陶器が出土しました。寺畑遺跡からは二彩の瓶や鉄鉢形が、石橋北遺跡からは三彩の小壺が、それぞれ細かな破片の状態で出土しています。国内での三彩・二彩陶器は300を超える遺跡から出土していますが、奈良、京都、大阪など近畿地方に多く、茨城県内では10例に満たない貴重な出土です。寺畑遺跡からは仏堂、石橋北遺跡からは倉庫群など平安時代前期の重要な建物跡が発見されています。興味深いのは、正倉院にも伝世する高級陶器の三彩・二彩陶器が、当地へ伝来する歴史的経緯や使用の実態にあります。少なくとも、三彩・二彩陶器出土の背景には、当地における古代仏教文化の浸透や霞ヶ浦水運と物流の隆盛があったと考えられます。

(塩谷 修)



寺畑遺跡出土の二彩鉄鉢形(左側3点)・  
二彩瓶(右側) 当館所蔵

8/4(土)午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも古代コーナーに展示)

- 須恵器鉄鉢形土器
- 瓦塔、瓦堂



いしずりじゅうろくらかんが

# 石摺十六羅漢画

ぶっぼう ごじ  
—仏法を護持する16人の羅漢たち—

羅漢は阿羅漢の略称で、梵語ではアルハット (arhat) と云い、尊敬供養を受けるに値する人という意味があります。中国や日本に伝わって発展した大乘仏教(注1)では、一切の煩惱を断滅して清浄の智慧を得て、修学を完了し、もはや学ぶべきことがなく世間の供養を受くべき位に至った者と定義されています。後に賓度羅跋囉憍闇尊者を始めとして、16人の仏弟子を十六羅漢と称するようになりました。さらに時代が下がると、十八羅漢や五百羅漢といったものも生まれ、主に禅宗系寺院において画像や彫像が作られ尊崇されました。

この羅漢画は、肥後国(熊本県)の見性禅寺住職大空が天明2(1782)年に版行したのですが、中国五代の画僧禅月大師貫休(832~912)が描いた絵をもとにしたようです。また、もとの原画は清の聖回寺に伝わったもので、清朝6代皇帝乾隆帝(1711~99)が賛を認めた墨本であると第十六注茶半託迦尊者像の部分に記しています。描かれている16人の羅漢たちは、手に杖や数珠・経典を持つ者や手の指が特異な形を示している者が見られます。また、主に岩に坐してはいますが、その座り方は様々です。しかし、何といても一目で気になるのは、奇怪な雰囲気や漂わせながら滑稽ともいえるその面容でしょう。一人一人の特徴を見ていると時間のたつのも忘れてしまいそうです。これは、法雲寺(市内高岡)に伝来したもので、4箱に4巻ずつが入り、二重箱に納められています。外箱の蓋表には「石摺十六羅漢画」、内箱蓋裏に「十六大阿羅漢尊者 大雄山法雲正受禅寺」と箱書が見られます。(注1) 大乘独自の経典として般若経・法華経・維摩経・華嚴経が発生。自他にとられない自由の境地を尊び、その実践者を菩薩としている。

- 第一 賓度羅跋囉憍闇尊者(ひんどらばらだじゃそんじゃ)
- 第二 迦諾迦伐蹉尊者(かなかばしゃそんじゃ)
- 第三 賓頭盧頗羅憍誓尊者(ひんどらはらだせいそんじゃ)
- 第四 難提密多羅慶友尊者(なんだいみつたらけいゆうそんじゃ)
- 第五 拔諾迦尊者(ばつなかそんじゃ)
- 第六 耽没囉跋陀尊者(たんぼつらばつだそんじゃ)
- 第七 迦理迦尊者(かりかそんじゃ)
- 第八 伐闍那弗多尊者(ばしやなはつたそんじゃ)
- 第九 戍博迦尊者(しゅばかそんじゃ)
- 第十 半託迦尊者(はんたかそんじゃ)
- 第十一 羅怙羅尊者(らごらそんじゃ)
- 第十二 那伽犀那尊者(なかさいなそんじゃ)
- 第十三 因揭陀尊者(いんかだそんじゃ)
- 第十四 伐那婆斯尊者(ばなばしそんじゃ)
- 第十五 阿氏多尊者(あじたそんじゃ)
- 第十六 注茶半託迦尊者(ちゅうだはんたかそんじゃ)



第四 難提密多羅慶友尊者



第一 賓度羅跋囉憍闇尊者

## 石摺十六羅漢画 (法雲寺所蔵)

(中澤達也)

8/25(土) 午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(中世コーナーに展示)

● 法雲寺関連文書

※「石摺十六羅漢画」は第一~第十と第十六の計11幅を展示します。



おかべ どうすいが のうこうず  
岡部洞水画「農耕図」

—日本の農村風景—

農耕の様子は、掛軸や屏風、絵巻や絵馬などさまざまな形で残っています。洞水の「農耕図」もそんな作品のひとつで、春の農村の3つの風景を1枚の画面に描いています。

画面下は2人の男が今しも種漫しをしようとしているところです。2週間ほど水につけ発芽を促します。

画面中央は白梅の咲く農家の庭先で、獅子舞を家人が見物しています。獅子舞は中国から伝わったといわれていますが、五穀豊穡や悪霊退散の祈りを込めて新年に行われていました。

画面上は田植えの最中です。3人の女が手際よく苗を植えています。

農耕図は普通、春秋、あるいは春夏秋冬の四季が一对で描かれるのですが、春に続く夏の草取りや秋の稲刈りの風景は現在のところ見つかりません。発見されて博物館に持ちこまれた際、箱も無く、掛軸といえども掛けられないほどぼろぼろの状態でした。対幅だったのか、四幅対だったのか、あったはずの夏以降の部分といつの間にかはぐれてしまったようです。

土浦藩の絵師岡部洞水についてはすでに「霞」1・8号で紹介しましたが、江戸で活躍したにもかかわらず、没後しばらくして忘れられ、作品も重視されてきませんでした。

ところで、この絵には見どころがふたつあります。ひとつは、ここに描かれている農民の姿は日本の農村であることです。狩野派の絵師の多くは縮図（手本）を利用して中国風の農耕風景を描くのが常でした。しかしこの絵では満開の桜が田植えの適期を告げ、獅子舞をながめる男も女も日本風の鬘です。

もうひとつは、描かれている13人の描写が細かいことです。縁先に腰掛けた主人は獅子舞を指さし、老人と話し込んでいます。寄り添う女は妻でしょうか、正月の晴れ着姿です。種の入った籠をもつ男は顔を見合わせ、声をかけあっているようです。早乙女の後ろで苗を運んでいるのは顔色からすると若い男です。

洞水の作品の魅力は、昆虫や植物の描写が細部にわたっていることです。おそらく実物を見て写生をしているのでしょう。この「農耕図」も、真景を重視した洞水ならではの細やかさです。見どころを充分ご覧いただけるよう、今回はケースの手前側に近づけて展示いたしました。

(木塚久仁子)



田植え



獅子舞



種漫し

「農耕図」(部分) 当館所蔵

7/7 (土) 午後2時  
からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近世コーナー「城下町の文化」に展示)

- 岡部洞水「三猿図」(江戸時代後期)
- 岡部洞水「筑波山遠望図」(江戸時代後期)



# 城下町の洪水記録

いろかわ みとし かじき  
—色川美年の日記「家事記」—

弘化3（1846）年6～7月、土浦城下は洪水に見舞われました。この大水の詳細について、田宿町（現大手町）で薬種商を営んでいた色川美年が記録を残しています。今回は城下町を襲った洪水について、美年の日記「家事記」をもとに考えてみたいと思います。

6月15日の夜に降り出した雨は、その後一日の青天をみることもなく月末まで続きました。26日には降り続く雨で土浦藩士の長島尉信が浸水を恐れて、本箱や長持などを美年宅へ運び込んでいます。28日には水嵩が前日より1尺（約30cm）増し、木戸の外まで一面が水につかります。この日から城下町隣の真鍋村（現真鍋）との往来は舟になりました。29日には尉信自身が美年の家の二階に移ってきました。他の藩士らも高台の高津や真鍋へと引き移り、「東西へ走りて逃げまどう」有様となります。30日に天気は回復しますが水は増し、裏通りの物置が浸水、台所へ水が入るまで3～4寸（約9～12cm）に迫ります。

美年はこの日、川口（現川口町）で醤油醸造業を営む兄の色川三中に水見舞いの手紙を送ります。美年に対する返信のなかで三中は、「この大水の上へつなみは甚だ恐ろしき事に候」と大水に加えて「つなみ」がくることを警戒しています。この場合の津波とは地震により引き起こされるのではなく、増水した霞ヶ浦の水が東南（辰巳）方向から吹き寄せた大風などによって押し寄せてくる現象を指すようです。三中によると文化9（1812）年7月8日の「辰巳あらし」では2尺（約60cm）の津波がきて一面が水に浸かったそうです。もう一度美年の日記をたどってみると、6月28日に裏物置の床上げを、翌29日には土蔵の床上げをしていることが分かります。いずれも浸水まで1尺以上の余裕があったのですが、津波にそなえての対応だと記しています。霞ヶ浦の津波は土浦の地理的条件が引き起こす特有の災害といえそうです。7月に入っても水は増えつづけます。7月1日、三中が舟で田宿の美年のもとへやってきましたが、にわかには水が増したため急いで川口へ戻ります。美年が店や勝手の物を二階へあげさせたときには土蔵を残して水が入り、田宿町一円は川のようにになりました。日々水嵩が増し、しかも長期間浸水するのも土浦の洪水の特長でした。水は床上まであがり、水の増減に一喜一憂する日がその後も続きます。七夕の日、二階から外を見渡した美年でしたが、笹をだしている家はなく白波が立つのがみえるばかりで、「夢のようにて今日も暮れぬ」と綴っています。美年の家で水が引いたのは7月19日になってからのことでした。

美年は「誠に心細き」事態だとその心情を吐露しながら、ひたひたと迫りくる水禍のなか、自宅二階で筆をとりこの記録を残しました。自ら後世に伝えることで、子孫たちにこの災害を教訓として示し、絶対におろそかにしてはいけなさと警鐘を鳴らすためです。

「水中追々筆記して後に伝えんとす。幸いにして伝わらば、

子孫古を徴して今に比べ、必ずゆるがせに見る事なかれ」美年が日記の行間にこめた思いを、現代の私たちも受け継いでいかなければなりません。

（萩谷良太）



「家事記」個人所蔵

9/1（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近世コーナーに展示）

- 「防逆水私議」（7/22～9/2にテーマ展にて展示）
- 水害絵葉書（ " " ）

※弘化3年の洪水については本号の「市史編さんだより」もご参照ください。



# 戦時下の水郷めぐり

—戦勝祈願に鹿島・香取まで—

潮来や佐原など堀や水路に恵まれた自然豊かな風景は、古くから風光明媚の地として、多くの人々の心をとらえていました。とくに香取神宮・鹿島神宮・息栖神社の三社のお参りと、その途中の水郷十六島などの風景は、旅の楽しみとなるものでした。昭和6(1931)年に誕生した水郷汽船には、あやめ丸やさつき丸といった大型船があり、土浦や潮来、佐原、鹿島を行き交い、多くの観光客を運び、また子どもたちの遠足などでも利用されていたようです。

写真は水郷汽船のチラシです。児童生徒への利用案内で、250人乗りのあやめ丸や400人乗りのさつき丸の料金表が掲載されていますが、何より目を引くのが「米英撃滅・必勝祈願香取鹿島両神宮参拝」というタイトルです。本文は次のように続きます。「今年こそは！ 敵、米英と戦ひ抜き、勝ち抜く決戦の年であります。今こそ！ 二大武神に皇国必勝・敵国必滅の御神護と、出兵将兵の武運長久を心から祈願し、大神の御前に青少年学徒として誓って『撃ちてし止まむ』とする新たなる決意を堅めませう。弊社は来る四月一日より左の通り『日帰り生徒児童参拝船』の御申込を歓迎いたします。(後略)」

チラシに発行年はありませんが、昭和16(1941)年12月にアメリカ・イギリスと開戦していることから、昭和17年以降のものと思われます。香取神宮と鹿島神宮が二大武神であることが強調され、水郷観光が戦時色を帯びていたようすがわかります。土浦の学校からの参拝はあったのでしょうか。

土浦高等女学校(現土浦第二高等学校)の創立百周年記念誌『尚綱百年』には、あやめ丸やさつき丸等を利用した香取・鹿島両神宮への全校遠足があったとあり、日中戦争下の昭和12年11月には鹿島神宮へ、同13年6月には香取神宮への武運長久祈願遠足が実施されていました。土浦中学校(現土浦第一高等学校)の『進修百年』によれば昭和16年6月の修学旅行は、自転車で亀城公園を出発し、香取・鹿島両神宮を巡り、鹿島神宮前の吉見屋旅館に一泊するものでした。

昭和15年には茨城県から野外演習・勤労作業以外に学校単位での旅行を自制するよう指示もありました。戦争が本格的なものになるにつれ、物見遊山的な旅は憚られました。戦後には水郷観光のための汽船航路が復活しています。

(野田礼子)



水郷汽船チラシ 当館所蔵

7/28(土) 午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近代コーナーに展示)

- 水郷風景写真絵葉書(昭和時代)
- 真鍋国民学校児童の慰問文(昭和時代)



# 市史編さんだより

## —色川美年と長島尉信の交流 『家事志 第五巻』から—

「信姫さまも嘸御成長の御事と…」これは土浦藩士長島尉信の手紙の一節です。初めてこの手紙を読んだ時、いったい信姫とはどなたであろうか？藩主のお姫様には信姫はいないはずだし、ご家老など上級藩士の子女だろうか、などと考え込んでしまいました。ところがなんとこれは色川美年の娘のことだったのです。

弘化3（1846）年土浦は大洪水に見舞われました。尉信は当時外西町（現大手町）の土浦藩士の長屋に住んでいましたが、浸水するおそれがあるので、6月末頃から田宿にあった色川家の薬店へ避難させてもらいました。水がなかなか引かなかったので、結局丸2ヶ月美年と生活を共にすることになりました。その間に美年に女の子が生まれたので、尉信に名付け親になってもらったのでした。尉信は自分の名の一字をとって“信”と名付けたのです。

そういう縁もあって、尉信はことに信を気遣って度々手紙の中で様子を尋ねています。しかし信に限らず美年の家族、特に子ども達のことについて始終気遣っている様子が、手紙の中に表れています。

尉信はもともと美年の兄である三中と親交があり、義兄弟の契りを結ぶほどでした。しかし土浦藩に招かれて外西町に住むようになってから、住まいが近いこともあって美年とも付き合うようになると、次第に交流を深めるようになります。尉信は美年の穏やかな人柄を愛し、美年は尉信の学問を尊敬すると同時に、祖父に対するような親愛の情を感じていたように思われます。お互いにたびたび訪問しあって会話を楽しみ、その間には手紙を交換して、近況を尋ねたり学問的な質疑応答をしています。

それらの手紙が、色川徳治家の来翰集と長島家の来翰集に多く残されています。今回の『家事志 第五巻 資料編』にも、銭の目方について尉信が美年に依頼している手紙を収録しましたが、そのほかにも開元銭を錘として秤を作ることに、世の中で用いられている秤に、自分の説に合うものがないと安心できないので、ご面倒でも合わせてみてほしい、などと自分の研究の片腕のように扱っている節が見えます。美年の家は薬種商でしたから、ふつう世間にはない、細かいものまで量れるレイテングという精密な秤があったので、尉信にとっては有り難い存在であったのでしょう「袋に入れた微細なものを、レイテグ（レイテング）で量ってみてほしい」という依頼状も残っています。

美年は、水害に関して、まだその兆しが無い頃に作柄の豊凶を尉信に尋ねたところ、お盆の頃には床上まで水が来るだろう、という返事が来たと書き留めています。また尉信が美年に対して、西南の方角で商売の利益が多かったのではないかと聞いたことがありました。たしかにその通りだったので、驚いた美年がその訳を問うと、美年の家の二階から土蔵の鬼瓦を見ていると、自然に西南の方を押す形に見えるので分かったのだ、との返事でした。これらのことを通して美年の尉信への尊敬の念はますます強くなっていったようです。自分の悩みや家の揉めごとに関しての相談もしています。

しかし、反対に尉信が美年に教を乞うこともありました。それは和歌です。美年は三中の影響もあって和歌をたしなみ、人々からも評価されていたようです。潮来の得意先の医者から、榊原侯の古稀を祝う歌を寄せてほしい、と頼まれたり、柴崎の人に讃岐の金比羅宮へ奉納するための短冊を頼まれたりしています。尉信は漢詩をよく詠んでいますが、和歌については自信がなかったのか、時々和歌を添削してほしいと頼みます。それに対して、例えば、ソをノに替えた方がよいとか、ケルでよい、などと助言しています。そしてしばしば自分の詠んだ歌を手紙の末尾に添えて、ご高評ください、と言っていますが、尉信はいつも、とても素晴らしい、などと賞賛しています。どちらかと言えば学問的な話題が多く硬い感じの三中との交流にくらべ、美年との付き合いは硬軟両様とでも言えますか、家族を中心としての親交に、学問的な話題や風流に関することまで、幅広い付き合いだったように思われます。それはふたりの人柄に加え、娘ひとりだった三中と違い、何人もの子どもや、しっかり者の妻に恵まれた美年の家族の存在も大きかったのではないのでしょうか。

ぜひ『家事志 第五巻』を手にとって、これらのことを感じて頂きたいと願っています。

（市史編さん係非常勤職員 菅井和子）

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号では、昨年度の校外学習に参加した児童の皆さんから後日送っていただいたお手紙の一部をご紹介します。(原文のまま)

## 博物館へのお便り ～昨年度校外学習の感想～

- ・1260年前の布がみれてうれしかったです。ぬのの右はじにいつどこでできたか書いてあるなんてすごいと思いました。いろいろなことが分かってとてもうれしかったです。(市内小学校3年生)
- ・あんどんに火をつけて電気をけすとすごく暗かったです。そう考えると、昔の人は、この暗さが毎日だったんだからすごい!と思いました。(市内小学校4年生)
- ・ぼくはあまり昔のことにきょうみがなかったけれど調べたら少し歴史のことが好きになりました。昔の道具は電気を使わないので電気がムダにならないと思いました。(市内小学校4年生)
- ・とくに、体験が楽しかったです。植物からそだてて、たいへんな事をやっとの事でのりこえてつくったきものをむだにしないことは、いいなと思いました。(市外小学校4年生)
- ・はたおりのときは少しむずかしかったので手伝ってもらってなんとかできました。とってもすごいと何度も思いました。家に帰って家族にはたおりきのことなどを話しました。(市内小学校4年生)
- ・わた切りろくろやはたおり機の体験ができて、昔の人の気分になりました。今のわたし達ではまねのできないことが博物館に、いっぱいつまっていました。(市内小学校4年生)
- ・刀に刀文というもようがあることを初めて知りました。むかしの道具(すみびアイロン、こてなど)を見たり2階では実さいにさわったりすることができて、とても勉強になりました。きじょう公園のお城のあと地が一番心に残りました。じしんで門がしまって入れませんでした。すごい建物だと思いました。早くきずがなおったらはくぶつ館に見に行きたいと思います。(市内小学校4年生)

### コラム(20) - 「霞」20号を迎えて -

展示室だより「霞」も今回で20号となりました。平成19年の展示室リニューアル後、3ヶ月ごとに行う総合展示の展示替えの度に発行を重ねました。5年の月日が流れたことは感慨深いものがあります。

本紙はご覧の通り手作りで、「短信」以外は職員で分担し原稿の作成・編集・印刷をしています。創刊号では「霞」を「従来の展示資料の解説図録に代わるものとして、博物館のお知らせなどを盛り込みながら展示替えに合わせて3ヶ月ごとに継続して刊行する」とご紹介していました。四苦八苦しながらもなんとか1号1号積み重ね、新しい形での情報発信が続けられたことは、ひとつの成果といえそうです。

とはいえ、毎回発行まで自転車操業になりがちで、いかにわかり易い文を書くかなど課題もあります。よりよいものをお届けできるように、検討を重ねながら発行していきたいと考えています。どうかこれからも長くお付き合いいただければ幸いです。(野田礼子)

### 情報ライブラリー更新状況

【2012・7・1現在の登録数】

古写真 492点(+5)  
 絵葉書 399点(+5)

※( )内は2012年4月1日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

### 霞(かすみ)

2012年度

夏季展示室だより(通巻第20号)  
 編集・発行 土浦市立博物館  
 茨城県土浦市中央1-15-18  
 TEL 029-824-2928  
 FAX 029-824-9423  
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>  
 1~6ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2012年度夏季展示は、2012年7月1日(日)~9月下旬となります。「霞」2012年度秋季展示室だより(通巻第21号)は10月2日(火)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。